卒業論文

葬祭業における宗教間比較分析

―葬祭業者と仏教の結びつきに着目して―

平成 17 年度入学
九州大学　文学部 人文学科 人間科学コース
社会学・地域福祉社会学専攻

平成 21 年 1 月提出

【要約】

本稿では、現代の日本における葬送儀礼について仏教・神道・キリスト教のそれぞれについて特徴を調べ、宗教間で比較検討することを目的とする。特にいわゆる「葬式仏教」と呼ばれるような仏教と葬祭業者との結びつきに注目し、両者の収益構造について神道・キリスト教の事例と比較させながら考察する。また、それに付随して、「葬式仏教」という構造が仏教と葬儀のあり方にどのような影響を及ぼしているのか、という問題について死生学的見地からの考察も加える。

まず第 1 章において、現代の日本で多く行われている仏式葬儀の実態を、儀式の手順や担い手、費用といった観点から詳らかに明らかにしていく。「葬儀」が商品として高度にパッケージ化されており、施設や備品のみならず儀式そのものさえもサービスとして認識されていることが示される。また、葬儀会社に払う費用とは別に、寺院に対しても布施としてかなり多くの金額が払われていることも確認できる。

続く第 2 章では、神式・キリスト教式の葬儀の実態を検討し、前章の仏式葬儀と費用構造を比較する。その結果、神式・キリスト教式の葬儀は仏式葬儀に比べると儀式が簡素化されていることが判る。また、神社・教会に払う寄付金額も仏式浅生儀において寺院へ払う布施と比較してかなり少なく、結果的に葬儀費用が大きく減額となるのである。

第 3 章では、「なぜ仏式の葬儀では多くの費用がかかるのか」「なぜ日本の葬儀は仏式が大多数を占めるのか」という問題を、仏教と葬儀および葬祭業者の出現について歴史的に考察する。寺院には旧来的な「檀家制度」が国家の政策転換や都市部への流出によって形骸化し、農地改革によって私有地からの収入が断たれたため、葬儀などの法要を収入基盤にせざるをえない事情があった。そこで機を同じくして出現した総合請負業的性格を持つ葬祭業者と連携することで、結合した収益構造をもつようになり、以来昨今までその結びつきが続いている。さらに、仏教のこうした状況に対して神道・キリスト教はどのようにして収入を得ているのかについても検討し、それぞれの宗教についての収入構造の特徴を比較する。

第 4 章では、前章までの考察を踏まえて、仏教と葬祭業者の利益を重視した結びつきが具体的に仏教と葬儀のありかたにどのような影響を及ぼしているのか、また我々はどのように「葬儀」に望むべきか、という問題について死生学的論拠を踏まえて論じる。

葬祭業者はいまや葬儀を行う仲介業者ではなく、オーガナイザーとしての地位にあり、葬儀の手段や道具のみならず、知識や意義までも提供するようになった。こうした状況の

一端を担っているのが、「葬式仏教」と呼ばれる仏教の体質であり、葬祭業者と強く結びついた寺院である。本来葬儀は僧侶の教義の場であり、一般人と仏教が接点を持つ貴重な場であったが、パッケージ化され効率化された現代の葬儀においては喪家や遺族と僧侶がきちんと対話できるような場面は非常に限られてしまった。儀式がサービスと見做され、布施は対価と同一視される。仏教の教義をきちんと確立することが難しくなっている。また、葬祭業者にとっても、喪家と僧侶の間に間接的に入ったことによる軋轢や、知識不足によって対応しきれない部分があるという。故人や遺族が葬儀の担い手としての意識をしっかりと持ち、ひとつひとつの儀礼の意味をしっかりと知ることによってほんとうに満足のいく葬儀をあげることができる、そしてそれが自らの死―ひいては生をきちんと考えるきっかけとなる、と述べて本文を締めくくっている。

【目次】

葬祭業における宗教間比較分析

―葬祭業者と仏教の結びつきに着目して―

はじめに・・・